

教職をめざす みなさんへ

教職を目指す皆さんへ —大志を抱いて進みましょう—

文学部 人間関係学科

准教授 佐々木 隆夫

皆さんが教職を目指したとき、なんらかのきっかけがあったと思います。例えば、高等学校までの教育の中で素晴らしい先生に出会って、「この先生のように生徒を将来に導いていきたい」と考えることもあったかもしれません。一方で、自分の好みと一致せず空回りしている先生をみて反面教師として捉えたことがきっかけだったかもしれません。様々な理由はあるにせよ、皆さんは教職という後に続く者を指導することを志しました。

さて、各自の志を考えた際に、地元の教育委員会所属の教員や、出身の学校に勤めて、将来を担う子ども達を指導したいと考えるかもしれません。もちろん、その考え方を否定するつもりはありませんし、「地元から得た知識や情熱を地元に戻元する」といったことで大いに賛同しています。しかし、昨今の少子化等の社会背景を考えると、必ずしも地元就職できるとは限らず、私がかつて勤めていた長崎県の大学を卒業した学生は、距離のある静岡県に勤めていることもあります。かくいう私こと佐々木も神奈川県出身で、現在でも実家は神奈川県にありますが、愛媛県、徳島県、長崎県、奈良県と転籍しつつ大学、短期大学の教育活動を行い、現在、別府大学に着任しています。

私の実家には母親が一人で暮らしており、最初に愛媛県の大学に着任した際には、「実家から近いところに住まなくて良いのだろうか」という考えが少なからずありました。とはいえ、愛媛の大学と縁があったと思い愛媛で過ごすことになりました。その

後、任期の関係で何回か転籍をしましたが、着任したそれぞれの大学や短期大学で、学生、教職員、地域の方々等と過ごし、楽しい毎日を過ごすことができました。様々な見方はあると思いますが、私自身にとってはその土地ごとに新たな学び（趣味活動を含む）で、有益に過ごしています。

ここで長崎県に着任した時に学び、現在も続けている茶道から、皆さんの教育、とくに生徒指導に役立ち得るお話をしたいと思います。茶道の点前を行う際、床の間の掛け軸に禅語等を示すことがあります。その1つに「人間到處在青山」とあります。書き下し文（よみがな）は「人間到る処、青山あり（じんかんいたるところせいざんあり）」となります。なお、青山は墓地を示します。これは幕末の僧侶である月性（釈月性）が示していて、簡単に言い直せば「墓はどこにでもつくることのできるのだから、人間はどこでも活躍することができる」ということになります。

上述したように少子化の影響等で、必ずしも地元就職できるとは限りませんし、遠くに着任した事例も書きました。一見すると、暗い文章になるかもしれませんが、見方を変えれば、皆さんの着任先は日本国内のあらゆるところであり、そこで活躍することが、皆さんに天啓として与えられた責務であると考えています。教育者として、そこで出会う生徒には、「先生がどこから来たにしる、自分を未来に向けて導いてくれる人」として位置付けられます。したがって生徒指導に関して、「自分の地元以外の子どもたちだから」と蔑ろにしたら、生徒指導のみならず、教科教育でも生徒からの協力を得ることなく、1人で空回りしていく状況になり得ます。学校教育の難しいところは、生徒との協力がなければ授業を成立させていくのは困難になるし、一旦失敗すると、「学年の上から下へ連綿と悪評が続いていく」といった形になることもあります。そのため、常に全力で生徒指導し、生徒からの信頼を得た上で、教科教育をしていくことが求められます。全力を出して成功を得ることができなかつたと、いい加減に実行して成功を得ることができなかつたというのは、

同じ不成功であっても、自分の内面にある悔しさも異なるでしょうし、皆さんの授業や指導を受けた生徒へ悪影響を及ぼすこともあります。

そのため、皆さんが「この教育では〇△にこだわりたい」といった大きな志をもって着任していくことが求められますし、現実問題として皆さん方が着任する際には、勤務地を選ばないことで、その大志をいち早く実践することが可能になります。

皆さん方の教職者生活が充実していくように、日々努力し、大志を抱くようにしましょう。

教職をめざす皆さんへ

食物栄養科学部 食物栄養学科

准教授 梅木 美樹

「人はなぜ勉強をするのだろうか？」この疑問はきっとみなさんも一度は考えたことがあるのではないのでしょうか？私もこれまでの人生において、この疑問を何かしらの折に考えることがありました。子どもが生まれてからは、子どもからもこの疑問をぶつけられたことがあります。「将来自分がやりたいことができるために必要なことだよ」とか「将来の選択肢を広げるためだよ」といった受け答えしかできずにいました。子どもも自分自身も納得のいく答えではないということは感じていました。

そんなある時、小学生だった娘の塾の国語の問題を何気なく見ていたところ、明治大学の齋藤孝さんが執筆した「勉強なんてカンタンだ！」という著書が引用されており、ある文章に出合いました。人はなぜ勉強するのだろうかという疑問に納得のいく答えが書かれてあったのです。その本には、次のようなことが記されていました。

『じつは、勉強をするということは、おもしろい人間になるってことなんだ。国語、算数、理科、社会…。勉強して「知っていること」を増やしていくことは、魅力的な人間になる第一歩ってことなんだね。』

魅力的な人間になるということは、どの職業においても大切なことですが、教員にとってはより重要

になってくるのではないのでしょうか？なぜならば、魅力的な教員と出会うことがその後の人生に大きな影響を与えることを私自身が経験したからです。

私の人生の中で、最も影響を受けたのは、大学の卒業論文を指導してくださった恩師でした。高校の家庭科教員になることを夢に大学に進学した私の人生を変えた先生です。恩師は、自分の専門分野はもちろん、それ以外のことにも常に関心を持ち、新しい情報のアンテナを持ち続けている先生でした。恩師が魅力的だったのは、「知っていること」が多かったことだけではありません。実際に自分でやってみるといふ経験が豊富だったことも魅力的でした。ディスカッションを通して恩師のこれまでの経験を聞くことはとてもわくわくしたことを覚えています。また、様々な経験をされた恩師の広い視野から生まれる柔軟な発想力は本当に憧れました。さらに、恩師は栄養学の分野では著名な先生でしたが、研究を始めたばかりの私のアイデアにもしっかりと耳を傾けてくれました。それが嬉しく、もっと研究をしたいという意欲が高まりました。恩師には知識の引き出し、経験の引き出し、それを応用できるアイデアの引き出し、学生の学ぶ意欲を高める引き出しといった沢山の引き出しがありました。私はそのような魅力的な恩師のもとで自分にしかできないオリジナルの研究をしたいと思うようになり、研究の道に進みました。

皆さんは引き出しの少ない先生と引き出しの多い先生、どちらの先生の授業を受けたいですか？きっと後者だと思います。その引き出しを増やすために皆さんは今勉強をしているのではないのでしょうか。

昔と比較して近年は、テレビやインターネット、スマートフォンが普及し、情報を簡単に入手することが可能になっています。情報を見たり、聞いたりすることには恵まれていながら「経験する」という機会には恵まれていない印象を授業の中で感じています。何かを教える時、自分の経験から出てきたエピソードを絡めて話をするときと印象深く伝えることができると思います。ですから、学生のうちにできるだけ、「経験の引き出し」を増やしてほしい

と思います。授業は、考え方も学力も異なる児童・生徒・学生を対象とします。当然ですが、その子に合った教え方、言葉のかけ方は異なります。一人一人に合った指導は難しく、私自身も日々悩んでいます。しかし、そんな時にもきっとこれまで自分が経験したことから得られた引き出しが役立つと信じています。

最後に一言。私は、最終的に小さい頃からの夢だった家庭科教員ではなく、大学の教員の道を選びました。研究もでき、教員としてのやりがいもある欲張りの職業に就くことができました。しかしながら、家庭科教員をめざして大学時代に学んだことは、今確実に役立っています。人生に無駄はひとつもありません。教員をめざす皆さんが「引き出しの多い魅力的な人間」になってくれることを期待しています。

